
世直し

ぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世直し

【Nコード】

N8208I

【作者名】

ぐり

【あらすじ】

いつの間にか見覚えの無い所にいた。

男が出てきて

「もうすぐ死ぬと告げる」

世直しをすれば地獄に行かなくて済むと言われ…。

(前書き)

あなたならどうしますか？

気が付くと見覚えのない場所に居た。見覚えと言うより景色が無いのである。白に近い灰色の空間にポツリと独りで立っていた。

家の中に居ても何かしらの家具がある。それ以前に壁がある。寝ていれば天井が：ここにはそれもない。足元を見ても灰色一色で至って居心地が悪い。

浩二は次第に不安になり、苛立ってきた。自分の思い通りにならない状態に神経を逆なでされる。

「はいはい、こんばんわあ。旦那さん」

軽薄この上無いと言った調子の声が聞こえて来た。振り返るとそこにはいつの間にか二人の人影が。

声を掛けて来たのは、黒いスーツに身を包んだ、眼鏡をかけた男性と

「!?!」

十年前に故人となった筈の浩二の妻の姿があった。現実にはあり得ない事に驚きつつも妻の所に行こうとすると

「はーい。旦那さんはこれ以上近寄ったらあきまへん」

男に文句を言おうと顔をむける、ピッタリとなでつけてある七三の髪、口元は軽薄そうに笑っているが黒縁の眼鏡から除く細い眼は笑っておらず、気おくれする程冷たい。

気押されるように口をつぐみながら浩二は必死に考えた。

そして

『これは、夢である』と結論づけた。

「そうですね。旦那さんが思ってはる通りこれは夢です」

まるで浩二の心を読んだかのようなタイミングで男が口を挟む。

「ですがな、旦那さんこれただの夢ちゃいますよって。夢は夢でもこれからお話する事は現実にかかる事ですわ」

「これが俺の夢ならお前はいらん。市子だけで良い」

「まあ、私の話を聞いてもらわんと困りますんやけど、去れいうんやったら去ります。が話聞いた方がええと思いますよ」

「お前の話など要らん。市子がおれば良い」

「そうは行きまへんのか」

男が言うには、男を追い返せば市子も一緒に去って行く事になるらしい。

「すばり言わしてもらいますと。旦那さんあんさん直に死にます」

浩二は市子に先立たれていらい、口癖のように「死にたい。市子の所に行きたい」と言っていたがそれは決して本心ではなかった。ただただ寂しく行き場のない気持ちをその言葉で回りに訴えていただけだった。

もうすぐ死ぬと言われても「はいそうですか」とは言えない。

男は、「あの世」のものだと言った。

「まあ、分かりやすい言葉で言ったら死神ってやつですわ」

あの世に向かう魂が迷子にならないように迎えにくるのが本来の仕事らしい。

「で、あんさんがこのままやったら向かう場所、まあ地獄と思ってもらったらええんですが、そこが最近いっぱいいっぱいの状態になってしまってますな」

面と向かって、「地獄行き」を言い放つ男。

「で、まあほんまの極悪非道な奴はしゃあないとしても、本人の心がけ次第ではその手前に行けそうな人をそっちに行けるようにしようって事になりましたな」

それで、浩二の所に来たのだと言う。

「私らは、『世直し』って呼んでます。残り少ない期間でも自分のした事を反省して生き方を改めて貰うと言う事ですわ」

「その世直して奴をすれば、市子と同じ所に行けるのか？」

「それは、時間がかかりますやろなあ」

男が言うには、市子本人は本当は極楽に行ける筈だった。が浩二のした事がある程度背負って行ったので地獄までは行かないまでも、結構地獄よりの所に行ったらしい。

「奥さんは、気張りましたでえ。本当に死んでからも功德を積んで今の所にきましたんや。ほんまならもつと早くに成仏出来た筈なんですが…」

「成仏してないってどういう事だ。さては坊主が手を抜いたんだな」「ちゃいますわ。旦那ですわ。奥さんの死後旦那さんが家族まあ、子供さん達の事ですわ。を苦しめたんが元で奥さんの成仏が遅れるって事ですわ」

市子が成仏出来ないのは自分のせいだと言われても浩二には納得が行かない。

「旦那さんが迷惑かけるお人だって分かっておって、直せずに先に死んでしまったから、旦那さんがしでかす事の責任の一端は自分にもある言い張りまして、ほんまは結構良い所に行って直に成仏出来る予定だったんを旦那さんの罪を肩代わりしてくれたって事ですわ」

どう転んでも、市子が成仏出来ないのは浩二のせいらしい。

「まあ、娘さんが丁寧に供養してるから、悪い様にはなりませんけどなあ。旦那さん…」

あんたはちがいまっせ

そう言った表情の冷たさと言ったら思わず震えがくる程。

「旦那さん今のまま死んだら。誰も旦那さんの供養なんざしてくれはりません」

浩二は今まで死んだら市子と一緒に居られると思っていた。

「あの世にも、階級ってもんがあります。そりゃあ、ピンからキリまでありまっせ。でもそれは生きている時に自分がしてきた事の結

果ですわ。いくら金を儲けても人泣かし続けたお方は良い所にはい
けまへん」

身を粉にして働いて貯めた小金に執着している浩二を嘲笑うかの
ような言葉。

「あの世に行ってもものいうのは、金じゃありまへん。人や社会、環
境にどんな事をしてきたのかがものいいますのんや」

「俺は、妻子を養うために必死に働いてきた。誰にも迷惑などかけ
とらん」

「旦那さんはほんまに働き者でしたなあ。」

そう、浩二は一生懸命働いて来た。休み返上で、朝早くから仕事
をしてきた。

「旦那さん。仕事以外はなんにもしてこんかったから」

仕事をして金を稼いでその何が悪いと言うのだ

「真面目に仕事をして稼ぐ事は悪い事じゃありまへん。けど、人に
手伝ってもらって稼いでいるのに、自分だけで稼いでいると思うのは
間違ってるって事ですわ」

「家族を泣かしちゃあきまへんな」

家族を泣かした覚えなどない。

「子どもはあんさんの所有物じゃおまへん」

何を言っているのか分からない。

「旦那さんは、息子さんの嫁さんと娘さんを泣かし続けてますんや」

……さっぱり思いつかない。

「おくさくくん。駄目ですわ。この人には世直しは出来まへん。
自分が自分の気分で回りにあたり散らしている事も何にも自覚あり
まへん」

「この人は、自分の事しか考えられない人なんです」
初めて市子が口を開いた。

「市子：」

自分の事しか考えられない人。市子から告げられた言葉は何よりも心に届いた。

「じゃあないなあ。旦那さん、奥さんに感謝せなあきまへんよ。奥さんが助け舟だしてくれたさかい言うんですが」

男が言うには、浩二は自分の気分で息子の嫁と娘に嫌味を行ったり嫌がらせをしたりしているらしい。

「旦那さん、葬式代、葬式代言うてますけど、誰が葬式だすんですか？」

「お子さん達ですわな。そのお子さん泣かしてどうするんですか？」
浩二は現在独り暮らしをしている。息子夫婦と同居したがうまくいかず、娘夫婦と同居したが上手くいかず。そんな状態は当然知っていると言わんばかりに畳みかける。

「自分では何もしないで全部人に頼む。相手の事情も何も関係なくしてもらえんと怒鳴り散らし、『別居するか？』が脅し文句。別居したらしたで近所にある事無い事言いふらす」

「『通帳取り上げられて追い出された』ですか？娘さん、旦那さんが度々チェックしに来ては足らん言われて困ってますやん。印鑑は旦那さんがもってはるのに」

「しかも、娘さん通帳差しだしてんのに、通帳取り上げられて追い出されたですか？」

「一緒に住んでいた頃は、孫の運動会に誘われても出掛けなかったのに、別居したら見に行くんですか？」

「世間ではそういうのは、嫌がらせて言うんですけど」

「自分が構ってもらえんで寂しいからって何でもしてええんですか？」

「まだまだありまっせ。いいまひょうか？」

浩二からは言葉が出ない。深く考えた結果では無い。ただ面白く

なくて、その気持ちを分からせたくて。自分と同じ嫌な気持ちになれば……。いやそうじゃない。

「旦那さん、あんさんのは『逆恨み』ちゅうんですわ。旦那さんが奥さん亡くして寂しいからって、お子さんにもそれを望むのは傲慢ですわ。お子さん達は旦那さんじゃない。母親が亡くなったからその先の人生一生不幸でいなければならなんて事はないんですわ」

何を言っても言い訳にしかならないのは分かっている。けれどではどうしたら良いのかが分からない。どこかで何かが違ってしまっ

た。

「旦那さん、何でもかんでも人のせいにしちゃあきまへん」

「旦那さんが今から必死に世直ししても、傷つけられた人たちは簡単には認めないかも知れまへん」

「……」

「旦那さん、今のまま死んだら、喜ばれるだけですわ。葬式だって挙げてもらえるかどうか」

「……」

「死んだ時に、「とんだくそ爺だったけど、最後はちょっと人が良くなっただけじゃないか」って言われるのと言われないのとは大違いですわ」

「さあ。そろそろ眼を覚ます時間です。言わんでも良いですけど、決めて下さい」

「世直し　　しますか？　　しませんか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8208i/>

世直し

2010年10月8日15時20分発行